

# 開拓者魂を持つ土地柄が はぐくむ未来への芽

「父祖の地」からやってきた  
イチゴ農家の人々

北海道伊達市郊外（大滝区）のビニールハウスで今年7月21日、今秋の収穫を目指す夏イチゴの苗（品種Ⅱ夏実）の定植作業が行われたというニュースが、ちょっとした話題を呼んだ。

豊富な魚介類とともに「だて野菜」と称される多種・高品質の農作物で有名な伊達市だが、イチゴはまだ産地として確立しているとはいえない。にもかかわらず夏イチゴの苗の定植が話題を呼んだのは、その作業を行ったのが、宮城県亶理町から伊達市へ移住してきたばかりのイチゴ農家の人々だったからだ。

先の東日本大震災で大きな被害を受けた亶理町には、それまで約260戸のイチゴ農家があり、そこから産出される「仙台イチゴ」（主要品種Ⅱとちおとめ）は、隣接する山元町と合わせて東北一の品質と出荷量を誇っている。

父祖の地でもあるのです」

亶理伊達家（幕末期2万3000石）の時の当主・伊達邦成が自らの家族、家臣およびその家族、領民たちを率いて北海道へ最初に渡ったのは明治3年のことだ。以後、明治14年までに9回、計2609人の人々が、亶理から現在の伊達市地域へと移り住んだ。

明治維新以降の北海道開拓の先駆けとしても知られる亶理伊達家主従のこの思い切った大量移住の背景には、幕末維新の戊辰戦争に

た。ところが震災に伴う津波の被害により、約9割のイチゴ農家のビニールハウスが壊滅状態になったとされる。さらに人的被害も非常に大きかった。

その亶理町から7月半ば、まず4戸のイチゴ農家が伊達市へ移住した（続いて8月にも2戸のイチゴ農家が移住）。取材者は伊達市に到着したその足で、イチゴ農家の人々が大滝区のビニールハウスを視察する現場に、たまたま立ち会うことができた。

一度は諦めかけたイチゴづくりを、縁あって伊達市で再開する人々のまなざしからは、栽培再開の喜び以上に「この地で自分たちはどのようなイチゴづくりができるか」を模索する、イチゴづくりのプロとしての真摯な情熱が感じられた。

「亶理町と伊達市とは昔から非常に深いご縁で結ばれてきました。今回の大震災の後、仙台イチゴの名産地として名をはせる亶理町のイチゴ栽培が今後どうなるのかということ

において、母藩である仙台藩とともに亶理伊達家が奥羽越前藩同盟に加わって官軍に対抗した結果、領地を新政府から事実上はく奪されたことが大きく影響している。

つまり伊達氏一族でも名門をうたわれた亶理伊達家の移住および新天地開拓の成果が、現在の伊達市の都市としての基盤を成しているのだ。

それだけに、父祖の地・亶理町からわずか数戸とはいえ、大震災で行き場を失いかけていたイチゴ農家が深い地縁・血縁で結ばれた伊達市へ移住し、新たな人生を開拓しようという今回のプロジェクトが、外部の人間が想像する以上に伊達市全体（官民とも）に大きなインパクトを与えていることは想像に難くない。

「さらに、亶理町からイチゴ農家の人々が伊達市へ今回来てくださったことの意味は、大震災によって栽培の場を奪われた人々が、その代わりに伊達でイチゴづくりを単に再開する、ということだけにとどまりません。この一見小さな出来事が、現状の伊達市に与える影響はいろいろな意味で大きいと私は考えています」（菊谷市長）

## 大成功を収めた ウェルシールド構想

亶理町のイチゴ農家の人々による、伊達市でのイチゴ栽培再開の持つ意味——。一つの大きなキーワードは「移住」である。

伊達市が亶理伊達家の領民たちによる移住



まぐやひでよし  
菊谷秀吉  
伊達市長

については、関係各方面から大きな注目が集まっておりました。しかし、最終的に私たちのお誘いに快く応じていただき、伊達市へと移住していただける運びになりましたのも、そうした深いご縁のたまものだと思います」

そう語るのは菊谷秀吉伊達市長である。「亶理町と伊達市は姉妹都市提携を結んで30年以上が経過しましたが、そもそも私たちの暮らす伊達市を開拓したのは、亶理を領有していた仙台藩一門・亶理伊達家の人々でした。つまり亶理町は多くの伊達市民にとって

および開拓によって、その都市基盤が構築されたことは既に述べた。ほとんど人工物のない土地を切り開くことから都市としての歴史が始まった伊達市地域にとって、亶理伊達家の人々の「移住」は、この土地が生まれ変わるための最大の刺激だったといえる。

亶理町のイチゴ農家の「移住」もまた、「現状の伊達市への大きな刺激になる」と菊谷市長は考えている。だからこそイチゴ農家の受け入れに際し、伊達市は万全の準備をした。

例えば移住するイチゴ農家については、JA伊達市の臨時職員というポストを用意した。伊達市の第一次産業の新たな担い手としての期待もそこには込められているものと思われるが、亶理町から移住した農家にとって、イ



噴火湾に近接するフラットで暮らしやすい市街地



亶理町から移住したイチゴ農家による苗の定植



噴煙を上げる有珠山に移住者たちは北海道暮らしを実感

この構想がスタートするや、最初の5年間だけで約1300人の移住者、それも「ほとんどは定年直後の退職者を中心とする元気な高齢者」(菊谷市長)が伊達市に居を構えた。それだけでなく、そうした高齢者を支えるための生活サービス、福祉サービスに従事する人々を中心に30代の転入者が年々増えていった。少子化や20代の大量転出の流れは変わらな

いもの、団塊の世代が一齐に定年を迎えるということで大いに話題を呼んでいた「2007年問題」の一つの解決策を見事に先取りするような趣旨と相まって、ウエルシールランド構想は、かくして瞬く間にマスコミにも盛んに取り上げられ、全国各地から視察団が際限なく訪れるという超有名プロジェクトとなった。

また、ウエルシールランド構想は事業アイデアの秀逸さもさることながら、成功を可能にするに足る、伊達市ならではの土地柄の魅力も見逃せない。

「伊達市はいつのころからか『北の湘南』と称されるようになっていました。夏の涼しさはもちろん、特に北海道には珍しい、冬も雪が少なく温暖な気候がそのいわれになったのでしょう」(菊谷市長)

市域の南側は暖流が流れ、豊富な魚介の水揚げで定評のある噴火湾に面している。雪が少なくフラットで歩きやすい地形の中心市街地の北側に分け入れれば、北海道らしい雪景色の山並みも遠望できる。また、今も活動を続ける有珠山や洞爺湖を目の当たりにできる豊かな自然環境が、市の内外に湯量豊富な温泉地帯を形成している。

北海道の空の玄関・新千歳空港から車でもJR特急でも1時間半足らずの距離にあり、札幌市・函館市にも2時間程度でアクセスできる。地元の人々にとって、「このように魅力ある土地を選んで開拓してくれた巨理伊達

者



初夏から夏にかけての伊達市名物「だて軽トラ日曜朝市」

## 人に優しい伊達市の土地柄の源泉



高齢者が鍵一本で生活のできる安心ハウス(集合住宅)

チゴ栽培再開には、受け入れてくれた伊達市のためだけでなく「巨理のイチゴづくりの技術を絶やしたくない」という思いももちろんある。JA伊達市の臨時職員という「縛りの少ない身分」は、両者のいい意味でのギブ&テイクの関係構築という意味でも妥当だろう。

さらに住宅については、北海道電力の従業員用アパートの空き部屋活用で、公共料金とともに家賃を無料とするなど、被災したばかりのイチゴ農家の人々への配慮がなされている。

ところで、伊達市では、この「移住による刺激」を生かした事業を既に展開し、大きな成功を収めていることはよく知られている。今から約10年前に開始され、伊達市が一躍全国からの注視を集める契機ともなったまちづくりプロジェクト「ウエルシールランド構想」である。

「ウエルシールランド構想の本格的な事業開始は平成16年の半ばからですが、事業開始に先



高齢者が気軽に田舎暮らしを満喫できる優良田園住宅

駆けて事業推進の仕組みづくりを模索する官民協働の「伊達ウエルシールランド構想プロジェクト」を平成14年当初に発足させていますから、ウエルシールランド構想は今年でちょうど10年目に当たることになります」(菊谷市長)

ウエルシールランド構想の内容を一言で説明すれば「少子高齢化が進む中、高齢者が安心・安全に生活することができるよう、まちづくりを進めるとともに、高齢者の求めに応える新たな生活産業をつくり出し、働く人たちの雇用を促進して、豊かで快適な活力ある暮らしを実現しようとするプロジェクト」ということになる。

ここで、大きなカギとなったのが「移住」なのである。具体的には、全国から元気な高齢



高齢者に優しいライフモビリティ「乗合(愛のり)タクシー」

者を誘致し、伊達市に移住してもらおう。伊達市はそのための高齢者用住宅(厳しい基準を課した高齢者向け集合住宅)伊達版安心ハウス、ゆったりとした敷地で田舎暮らしを満喫できる優良田園住宅などを用意し、高齢者が暮らしやすい交通システム(会員制の乗合タクシー)ライフモビリティ)などの生活環境を整える。

そこから生じる住宅産業、新たな交通需要などに加えて、高齢者が運動不足や偏食などで健康を害さないような健康管理を旨とする生活サービスや各種福祉サービスを提供する。伊達市をはじめとする北海道の豊かな自然や歴史を満喫するための豊富な観光メニューも提供する。そのほか、各種のきめ細かな高齢者向け、生活産業を創出することで、それを雇用の場の創出にもつなげていったのだ。



冬の風物詩・おおたき国際スキーマラソン(毎年2月)

愛する伊達市……。この全国的にもまれな特色を持つ伊達市の象徴ともいべきウエルシーランド構想に關し、菊谷市長は今「転換点にある」と考えている。

高齢者医療サービスや介護保険に基づくサービスも、年々変化する利用者のニーズに合わせて少しずつ微調整がなされている。人が活用する制度はそれ自体が生き物であるわけで、変化はあらゆる制度に生じる宿命ともいえる。全国的に今も高い評価と注目を集める伊達市のウエルシーランド構想もスタートから約10年が経過した今、変化すべきときを迎えているという。

「これはまだ腹案の段階ですが、例えば国が20年以上も前に創設したシルバーハウジン



東日本大震災復興支援イベントには多くの市民が協力

「それが意外にそうでもなかった」(菊谷市長)のたという。

「伊達市は、もともとほかの地域に比べて知的障害者が多く暮らしているという特色もあります。障害者や高齢者への優しいまなざしが、一種の土地柄として、形成されていたのでしよう」

伊達市には現在、人口約3万7000人のうちの1%近く、約350名の知的障害者が暮らしている。日本の人口に占める知的障害者の比率は1000人に4人とされるから、

伊達市にはその2.5倍近くの割合で知的障害者がいることになる。

しかもそのうちの半数近くが市内60カ所以上の事業所で働き、一般市民の生活に違和感なく溶け込みながら、アパートやグループホーム、民間ホームや生活寮などで暮らしている。知的障害者にとって非常に開かれた土地柄といえるだろう。

伊達市に知的障害者が多く暮らすようになったきっかけは、昭和43年、旧厚生省のコロニー計画に基づいて北海道立「太陽の園」が伊達市内に設立されたことによる(入所者400名)。太陽の園は入所者がまち中で、できる限り自力で暮らしていけるような支援を積極的に行ってきた。

また太陽の園設立5年後の昭和48年には、伊達市が「太陽の園を巣立つ人たちに對する、施設生活から地域生活への移行の中継基地」として「伊達市立通勤センター・旭寮」を設立した。これによって現在にまで至る、知的障害者が地域に出てまちに暮らす伊達市のシステム基盤ができたのだ。

太陽の園および旭寮が編さんした『施設を出て町に暮らす』(ぶどう社刊)という本の第1章の冒頭はこんな文章で始まっている。

『伊達の駅に降りると、ホッとする』／正月休みを終え息子さんを太陽の園まで送ってきたお母さんの声は軽く、その表情は明るい。自分の住む町や列車内での刺すような視線をさけて、やっとたどり着いた伊達の町。／中

はできないかと考えています」

伊達市の進めてきた安心ハウスには入居者の要望を聞いてそれをかなえたり、アドバイスしたりするコンシェルジュがいる。初期の入居者は現在70代から80代になろうかという世代であるため、そうしたサービスになじんでいるが、ここ数年の間に定年を迎えた団塊の世代は、少し要望の方向性が違うという。

団塊の世代にはより個人的な趣味嗜好を大事にする傾向があり、例えば留守の間に掃除をしておいてほしいとか、料理だけ自分の都合のいいときにつくりに来てほしいなどという「世間的には少しわがままな要望」をしたがる人も少なくない。

「今までのウエルシーランド構想になじめる人には、そのままご利用いただいて、それとは別に、例えば個人の趣味嗜好をもっと大事にしながら伊達市で暮らしたいというような人があれば、もっと柔軟なサービスを行ってもいいのではないかと思っっているのです」(菊谷市長)

そうしたときにコーディネーターとしてのLSAの職分を広げたサービスを実施したり、有料のメイドさんを頼んで掃除や料理だけ行ってもらったりなどの制度もあってもいいのではないか……。約10年間ウエルシーランド構想を推進してきて、近年のニーズの多様化を受けて、菊谷市長はそのように痛感し

伊達市にはその2.5倍近くの割合で知的障害者がいることになる。

しかもそのうちの半数近くが市内60カ所以上の事業所で働き、一般市民の生活に違和感なく溶け込みながら、アパートやグループホーム、民間ホームや生活寮などで暮らしている。知的障害者にとって非常に開かれた土地柄といえるだろう。

伊達市に知的障害者が多く暮らすようになったきっかけは、昭和43年、旧厚生省のコロニー計画に基づいて北海道立「太陽の園」が伊達市内に設立されたことによる(入所者400名)。太陽の園は入所者がまち中で、できる限り自力で暮らしていけるような支援を積極的に行ってきた。

また太陽の園設立5年後の昭和48年には、伊達市が「太陽の園を巣立つ人たちに對する、施設生活から地域生活への移行の中継基地」として「伊達市立通勤センター・旭寮」を設立した。これによって現在にまで至る、知的障害者が地域に出てまちに暮らす伊達市のシステム基盤ができたのだ。

太陽の園および旭寮が編さんした『施設を出て町に暮らす』(ぶどう社刊)という本の第1章の冒頭はこんな文章で始まっている。

『伊達の駅に降りると、ホッとする』／正月休みを終え息子さんを太陽の園まで送ってきたお母さんの声は軽く、その表情は明るい。自分の住む町や列車内での刺すような視線をさけて、やっとたどり着いた伊達の町。／中

はできないかと考えています」

伊達市の進めてきた安心ハウスには入居者の要望を聞いてそれをかなえたり、アドバイスしたりするコンシェルジュがいる。初期の入居者は現在70代から80代になろうかという世代であるため、そうしたサービスになじんでいるが、ここ数年の間に定年を迎えた団塊の世代は、少し要望の方向性が違うという。

団塊の世代にはより個人的な趣味嗜好を大事にする傾向があり、例えば留守の間に掃除をしておいてほしいとか、料理だけ自分の都合のいいときにつくりに来てほしいなどという「世間的には少しわがままな要望」をしたがる人も少なくない。

「今までのウエルシーランド構想になじめる人には、そのままご利用いただいて、それとは別に、例えば個人の趣味嗜好をもっと大事にしながら伊達市で暮らしたいというような人があれば、もっと柔軟なサービスを行ってもいいのではないかと思っっているのです」(菊谷市長)

そうしたときにコーディネーターとしてのLSAの職分を広げたサービスを実施したり、有料のメイドさんを頼んで掃除や料理だけ行ってもらったりなどの制度もあってもいいのではないか……。約10年間ウエルシーランド構想を推進してきて、近年のニーズの多様化を受けて、菊谷市長はそのように痛感し



開拓の主役を担った巨理伊達家をしのぶ「伊達武者まつり」(毎年8月)

ているという。

また、特にそのことを痛感するようになったのは、父祖の地でもある巨理町のイチゴ農家を、伊達市へ誘致するべく本格的に動き出してからのことだという。

確かに新たな刺激が触媒となり、さまざまな化学反応を起こす連鎖の維持こそが、まちづくりという、得てして停滞しがちな「生き物」を常に活性化させる最大の要因なのかもしれない。

まったく見知らぬ土地への移住と開拓によって、伊達市の基盤を築いた先人の刺激に満ちた歴史の足跡は今もなお、北の大地に脈々と息づいているようだ。

(取材・文 遠藤 隆)

多くの知的障害者が明るく快適に、自立して暮らせるバリアフリーな土壌の上に、全国から移住してきた高齢者が第二の故郷として

転換点を迎えている  
ウエルシーランド構想

長い引用で恐縮だが、伊達市の土地柄の持つ優しさ、大らかさがよく分かる。こうした土地柄の延長線上に、高齢者をも積極的に受け入れる市民の土壌があると考えるのは、決してこじつけではないだろう。

略／障害をもつ人たちが優しく包んでくれる町。障害をもつ人たちが町のど真ん中で堂々と生きられる町。こんな伊達の町を、私たちは何よりも誇りに思っています。』

伊達市開拓の記憶が詰まった「伊達市開拓記念館」